

完結プロジェクト

毎日新聞社、毎日新聞出版、講談社、そして内田康夫財団が立ち上げた『孤道』完結プロジェクト。未完の小説『孤道』を結末へと導いた最優秀作品が決定しました。

『孤道』

内田康夫の“思い”を継ぐ作品がついに**決定**

最優秀賞

『孤道 我れ言挙げす』

和久井 清水

◎9月21日発売予定の「小説現代10月号」や「毎日新聞」、『孤道』完結プロジェクトのホームページでは、受賞者のコメントなどを掲載。

二〇一五年八月に毎日新聞の連載が著者急病のため休止となった『孤道』。内田康夫が書き綴った五〇〇枚の原稿は二〇一七年五月、未完のまま刊行されました。同時に続きを一般公募し、「世に眠っている才能の後押しができれば」という内田自身の思いを受けて、本プロジェクトが始動。約一年設けた募集期間も、今年四月末に締切を迎え、百作を超える応募がありました。一次選考で102作から12作を選び、二次選考ではさらに5作が残り、八月末に推理小説研究家の山前讓氏、毎日新聞社・毎日新聞出版・講談社の各役員と内田康夫財団による最終選考会を実施。厳正なる審査の結果、最優秀賞が決定しました。

受賞作は、幾つか気になる点があったものの、圧倒的な筆力で内田康夫が遺した謎を解明。特に「義麿ノート」の続きや物語終盤の意外な展開には目を見張るものがあり、未完の作品『孤道』を一つの結末へと鮮やかに導きました。

★受賞作は、内田康夫が書いた『孤道』(未完)と共に二〇一九年春頃、講談社から文庫判で刊行の予定です。

毎日新聞で『孤道』の連載がスタートしたのは二〇一四年十二月一日でしたが、内田康夫はその執筆直前に発行の「浅見ジャーナル85号」(「浅見光彦友の会」の前身である浅見光彦倶楽部の会報)で、「孤影往く熊野古道の茜草」という句を発表。『孤道』の重要な舞台である「熊野古道」が入っており、タイトル『孤道』の文字も含まれています。

そして、二〇一五年七月一日発行の「浅見ジャーナル88号」では、「草笛や蒼穹の道を孤り往く」という句を詠んでいます。感覚障害の病と戦いながら『孤道』を執筆している最中の作で、この句にも「孤」と「道」の文字が詠み込まれています。

二つの俳句からも、内田の『孤道』への強い思いが伝わってくるのではないのでしょうか？

それからまもなく内田は脑梗塞を発症。二〇〇一年から「浅見ジャーナル」に掲載していた俳句は、これが最後となりました。

